

次ページへ続く

Continued on next page...

彦根市立  
図書館  
琴堂文庫蔵狂言関係書目解題稿

「琴堂文庫」は、故井伊直忠<sup>なおたけ</sup>の収書である。直忠は旧彦根藩主である井伊家の第一五代当主で、かの直弼の孫にあたる。明治一四年五月に生まれ、昭和二二年四月没、享年六七であった。野上弥生子の小説「迷路」に登場する「染井の御隠居様なる江島宗通」のモデルであり、その「変人」と言われた生活ぶりがフィクションを交えつつ活写されているが、伯爵家当主として趣味に生きた人であり、またその趣味に関する書籍の収集をも趣味としたらしい。その収書一九、八一一冊が、没後昭和二五年に長男直愛氏<sup>なおあい</sup>（現彦根市長）より彦根市立図書館に寄贈され、直忠の号をとって「琴堂文庫」と名付けられたのである。念のため付け加えれば、これは直忠一代の収書であって、井伊家伝来の書籍とは別のものがある。また直忠はほとんど東京で生活しており、東京の古書肆より求めたものが多いようである。

さて同文庫のうち数がかつ貴重なのは易学・真言密教関係などであるが、能楽関係のものもその一つである。直忠は「名人」と謳われ能楽界で初めて芸術員会員となり文化勲章を受けた初代梅若万三郎に師事しており、能への傾倒ぶりは「迷路」に詳しいが、それに伴って関係する書籍を収集したらしく、謡本・囃子の手付の類が特に多い。そして恐

らくそれに伴って、狂言関係の書籍も集められている。これは直忠としてはついでのものであったのだろうが、数は多くても珍しいものの少ない謡本などに比べ、数は少ないが未紹介の貴重な台本を含んでいる。そこでここでは、間狂言を含めて狂言関係の全書目二〇点を挙げ、解題を加えることとした。この分野の書誌的研究は戦前の故笹野堅氏の研究以来あまりなされておらず、その意味でも少しは意義があるかと思う。ただし私あまり近くに住んでおらず、内容の検討を十分に尽す時間を持たなかったため、誤りも多いことと思われる。能楽関係の書籍の主なものについては国文学研究資料館で来年度に写真撮影を予定しており、それが閲覧に供されてから改めて検討を加えたいと思う。なお資料館での調査の際に同行された関屋俊彦氏（関西大学）、小林健二氏（第二室）に御協力を頂き、彦根市立図書館長西村直道氏をはじめ職員諸氏に種々御配慮を頂いた。厚く御礼申し上げます。

なお同文庫は一般に公開されており、閲覧は容易である。目録は、手書きの台帳が用意されている。本稿では書名はすべて仮に名付け、この目録に記載された書名と整理番号を補記しておくこととした。

# I 大藏流台本

## (1) 大蔵虎寛狂言本転写本 (96.8 狂言)

写本、一四冊。一三・〇×一九・〇。袋綴、全九三五丁。布目地に渋刷毛引の表紙で、題簽はない。第一冊(六七丁)・第二冊(七五丁)は、「小名狂言」、第三冊(六九丁)・第四冊(六四丁)は「大名狂言」、第五冊(四五丁)・第六冊(五五丁)は「脇狂言之類」、第七冊(六八丁)・第八冊(六四丁)は「鬼山伏狂言」、第九冊(六六丁)・第一〇冊(八二丁)は「集狂言」、第一一冊(七五丁)・第一二冊(八〇丁)は「髯女狂言」、第一三冊(六三丁)・第一四冊(六二丁)は「出家座頭狂言」を収め、各冊の扉の左上に右記の分類名を記し、その下に「巻」「式」と各冊での冊順を付す。なお冊順は整理番号に従ったが、本来「脇狂言之類」「大名狂言」「小名狂言」「髯女狂言」「鬼山伏狂言」「出家座頭狂言」「集狂言」の順であつたろう。料紙は楮紙。各分類冒頭に目録がある。本文に訂正や役名を若干だが朱で書き入れている。各曲に装束付・小道具付がある。曲ごとに丁を改め、一曲の終りが丁の裏に来る時は遊紙を一丁入れている。全一六五曲所収。「脇狂言之類<sup>式</sup>」の奥に、

十九世狂目大夫 大蔵弥右衛門虎寛

「集狂言<sup>式</sup>」(本来の最終冊)に跋文があつて、

寛政四のとし神無月末の五日／秦忌寸虎寛

の署名がある。大蔵流一九世宗家虎寛が書き留め大蔵流狂言の定本となった、いわゆる虎寛本の忠実な転写本と見られ、必ずしも珍しいもの

ではない。江戸後期の書写であろう。原本は笹野堅氏校訂「大蔵本能狂言」(岩波文庫)に翻刻されているので、所収曲等は省略に従う。

## (2) 大蔵虎寛狂言本転写一番綴本 (96.8 狂言集)

写本、一五六冊。一七・〇×一二・四。袋綴、各四〇三三丁、全一、九五五丁。赤錆色縞文様の表紙の左上に打付書にて、

爪盗人 集一

の如く、曲名・分類名・各分類中の曲順を記す。料紙は楮紙。分類名は「脇狂言」「大名」「小名」「髯女」「鬼山伏」「出家座頭」「集」「珍敷」の八種で、分類の配当・曲順ならびに本文が(1)と同様に虎寛本と一致している。虎寛本を転写して一番ごとに綴じ、袖珍本としたものであろう。

ただし、装束付・小道具付は省略されている。江戸後期の書写であろう。全一五六曲で虎寛本より九曲少なく、曲順の数字も飛んでいるが、彦根市立図書館に入った時既に九冊を欠いていたものである。欠曲は「連歌毘沙門」「秋大名」「縄縄」「附子」「鐘の音」「鎌腹」「伯養」「花子」「釣狐」。ただし大曲である「花子」「釣狐」は当初より欠けていた可能性もあろう。

## (3) 大蔵流十番綴狂言本 (96.9 狂言大倉流)

写本、一四冊。二三・三×一六・六。袋綴、全一、〇七七丁。青色無地の表紙の左上に題簽を付したのが第一・二・四冊に残っており、「狂言大

倉流<sup>十六冊之内</sup>と記す。第一・二・三・四・五・七・九・一四冊には、中央上に所収曲の目録を記した題簽が残っている。料紙は楮紙。各冊巻頭に目録がある。本文に役名を若干付し、数曲に朱にて本文訂正や型付を書き入れる。各曲名の下に簡単な装束付を記す。各冊一〇曲(第一〇冊のみ一一曲)、全二四曲を収め、所収曲は左記の通り(冊順は整理番号に従う。曲順は所収の順、曲名表記は内題による)。

第一冊(八九丁)

三人夫 昆布柿 餅酒 雁鴻 つくしのおく  
なべ八ばち 牛馬 松やに 煎物 くらま參

第二冊(七九丁)

じそう舞 無布施経 呂蓮 花折 仏師 水汲  
惣八 悪坊 悪太郎 いろは

第三冊(七五丁)

連歌毘沙門 大黒連歌 えひす大こく 福神 麻生  
目近 未広 三本柱 鎧 槌

第四冊(八二丁)

腹不立 飛越 名取川 骨皮 金津 薩广守  
底 なわなない 清水 柑子

第五冊(七五丁)

井偈沈 不聞座頭 猿座頭 伯養 腰折 蟹山伏  
梟 犬山伏 柿山伏 祢宜山伏

第六冊(八二丁)

竹生鳴 宗論 河原太郎 八句連歌 むねつき 右近左近  
乳切木 笄 柏落 鏡男

第七冊(九三丁)

狐塚 口真似 棒縛 昆布壳 武悪 鱸庖丁  
伊文字 引括 土筆 鈍太郎

第八冊(六二丁)

米市 居杭 舍弟 かふやくねり あわせ柿 鎌腹  
すはしかみ しびり 横座 いなは堂

第九冊(五四丁)

枕物狂 蛸 法師母 楽阿弥 祐善 通円  
ぬし 老武者 若市 髭矢倉

第一〇冊(七八丁)

隠笠 二人袴 さつくわ たちはい なりあかり やせ松  
鰻頭 樋酒 花盗 松ゆつりは 財宝

第一一冊(八五丁)

連歌盗人 瓜盗人 子盗人 盆山 磁石 長光  
茶坪 しんはい 文山立 三人片輪

第一二冊(八一丁)

人馬 秀句傘 墨塗 鴈盗人 鬼瓦 粟田口  
二千石 萩大名 鐘音 毒

第一三冊(六八丁)

栗焼 舟船 花論 鶏流 しよう方角 空腕  
千鳥 茫々頭 豊三 富士松

第一四冊(七四丁)

恵美須毘沙門 包丁聲 音曲聲 岡大夫 ひつしき聲 鶏聲  
舟渡聲 さいの目 八幡前 水掛聲

第一〇冊の「花盗」は目録には「花盗人」とあり、「松ゆつりは」は目録にはない。外題に「大倉流」とあるが、詞章から見て宗家系の台本であり、その弟子家のもので、江戸後期の書写であろう。第二冊の「水汲」は宗家系としては珍しい曲名だが、内容は虎寛本の「御茶の水」に近い。外題に「十六冊之内」とあって二冊を欠くことがわかるが、大名狂言を主とした一冊と鬼狂言を主とした一冊を欠いているのであろう。

(4) 飯島氏旧蔵大蔵流狂言本 96.8 大倉流狂言集

写本、三冊。第一冊二三・八×一六・一、第二冊二四・一×一六・一、第三冊二四・四×一六・六。袋綴、全二七二丁。ボール紙の後補表紙の左上に打付書にて「狂言集」と記し、その下に「巻一」「巻二」と巻数を付す。巻一のみ扉があり、「大倉流／狂言集 巻ノ二」と記す。料紙は楮紙。各巻頭に目録がある。各曲に装束付・小道具付がある。全二二曲を収め、所収曲は左記の通り。

巻一(七六丁)

蚊相撲 鏡男 瓜盗人 棒縛 荷葉煉 太刀奪

巻二(一〇三丁)

附子 千鳥 素袍落 末広がり 三本の柱 縄綯  
昆布売 伯母ヶ酒

巻三(九三丁)

鍋八撥 文山立 宗論 悪太郎 仏師 飛越  
腹不立 栗田口

各曲ごとに扉があつて曲名を記すが、「伯母ヶ酒」の扉の左下に「伊ゝじま直二／九一」、その他数曲にも「伊ゝじま」と記す。本来は一番綴本であつたものか。ただし巻一・巻二の目録の丁に「飯島／蔵書」の印があるので、原蔵者が合綴し、目録を付したものであろう。飯島直二・九一については未考だが、詞章から見て、大蔵流宗家系の弟子の稽古用の台本で、江戸後期の書写であろう。

(5) 大蔵流一番綴狂言本各種 96.22 秀句傘・96.23 大蔵流狸腹鼓・96.25 和泉流狂言本)

性格を異にするものを含むが、しばらく一括しておく。写本、九八冊(目録で「和泉流狂言本」とするものが九六冊)。大部分が二四・五×一六・三、左表の「伊呂波」から「居杭」までは二八・三×一九・四、「秀句傘」のみ二四・三×一七・八。袋綴、「秀句傘」を除いて仮綴、各三〜一八丁、全八一九丁。本文共紙の表紙の左上に打付書にて各曲名を記す。ただし外題を記さない冊もあり、原表紙の上に新しい表紙を後補した冊もある。「秀句傘」は薄茶色無地の表紙の左上に題簽を付し、「秀句傘 完」と記す。料紙は楮紙。全九九曲で、目録で「和泉流狂言本」とするもの

の曲名は左記の通り（曲順は整理番号に従う）。

蚊相撲	因幡堂	石神	魚説経	祐善／蛸	八幡の前
花折	腹不立	鞆猿	鞍馬参り	吃り	右近左近
樋之酒	悪坊	胸突	寝音曲	鬼瓦	賽の目
左近三郎	骨皮	しびり	瓜盗人	駈	菌
柑子	首引	土筆	鎧	栗焼	横座
柿山伏	合柿	御茶の水	鐘の音	二千石	呂蓮
神鳴	入間川	竹生島参	松脂	八尾	名取川
竹の子	鰻頭	鴈磔	腰祈	犬山伏	止動方角
蝸牛	箕被	木六駄	惣八	目近	真奪
狐塚	金藤左衛門	鍋八撥	悪太郎	文蔵	泣尼
節分	末広り	鴈厂金	芥川	禁野	千切木
月見座頭	月見座頭	賽の目	魚説経	左近三郎	花盗人
伯母ヶ酒	子盗人	庖丁奪	大黒連歌	重喜	毘沙門
神鳴	鶏聾	縄絢	人馬	河原太郎	枕物狂
六地藏	察化	仏師	伊呂波	拔売	業平餅
蛸	二人大名	佐渡狐	鬼ヶ宿	居杭	宗論

「祐善」と「蛸」のみ合わせて一冊とするが、「蛸」は別にあり、本文も同じである。外題の右肩に注記を持つものがあり、「狐塚」に「小名ノ十」、「鴈厂金」に「脇ノ十九」、「月見座頭」の一曲目の方に「七番習之内」、「鬼ヶ宿」に「井伊家狂言」、「宗論」に「大蔵流」、「禁野」（内題）

と「庖丁聾」に「廃曲」とある。「狸腹鼓」には「大蔵流」（極血習）とある。また「庖丁聾」の外題下に「抜書」、「人馬」の外題下に「略」とあり、「人馬」は冒頭部を省略している。「月見座頭」の一曲目の方は大蔵流台本だが、小謡・小舞の詞章などを鉛筆で書き入れている。恐らく旧蔵者が実際の——恐らく山本東次郎家の——舞台を見て書いたものであろう。二曲目の方は鷺流台本で、興味を持った旧蔵者が別に求めたものでもあろうか。目録は本書を三点に分けているが、「秀句傘」は別体裁であるため、「狸腹鼓」は注記があるために別にされたのであろう。また残る九六冊を「和泉流狂言」とするのは、「宗論」に特に「大蔵流」の注記があるために他は和泉流かと考えられたのであろうか。詞章から見ても、鷺流「月見座頭」を除いてすべて大蔵流台本である。また鷺流「月見座頭」、「宗論」はそれぞれ別筆だが、他は「秀句傘」「狸腹鼓」を含めて一筆と認められる。「狸腹鼓」の奥に、

昭和五年九月十五日写

また「花盗人」の奥に、

昭和十年二月吉辰

とある以外に年記はないが、その他もおおよそその頃の書写らしく、現行台本に近い。「木六駄」は大蔵流現行でも家によって相違するが、山本東次郎家の台本と同じである。なお「狸腹鼓」の後記に、

右は永年中絶致居候處天保七年再興同年四月二日相勳

井伊家御役者  
腹鼓 小川吉五郎 吉五郎仲  
小川徳之助

後見 脇本京四郎／阿州家御役者  
宮野孫左衛門  
後二幕府ニ被召出

とある。先代茂山千作の「狂言八十年」の「狸腹鼓」再興の経緯の項に、千五郎正虎の手記に、

天徳院様御所望ニ而 小川吉五郎相勤候処亦候師家ヨリ差支申被出とあると言うが、その最初の復曲の際の記録であろう。ただし詞章は、その後嘉永五年に正虎が復曲した(井伊直弼作と言われる)、いわゆる「彦根狸」である。「井伊家狂言」の肩書のある「鬼ヶ宿」も直弼作と言われるものである。

(6) 大蔵八右衛門派十番綴狂言本 (96.4 大蔵流狂言)

写本、一五冊。二一・八×一六・七。袋綴、全七九六丁、各冊前に遊紙一丁。茶色斜刷毛引の表紙の左上に題簽を付したのが第五・一〇冊に残っており、「大蔵流狂言」と記す。下小口に「イ」「ロ」「ハ」と記し、「タ」まであって「ヨ」を欠くので、一冊以上欠けているかと考えられる。料紙は楮紙。各冊巻頭に目録がある。各冊一〇曲、全一五〇曲を収め、所収曲は左記の通り(曲名表記は内題による)。

- 第一冊(イ、四二丁)  
蛭子毘沙門 隠 笠 牛馬 連歌毘沙門 夷大黒 唐相撲  
朝比奈 八尾 政頼 雷  
第二冊(ロ、五七丁)

- 若市 老武者 花盗人 土筆 栗田口 入間川

- 蚊相撲 鞆猿 人馬 大黒連歌  
第三冊(ハ、五八丁)

- 八幡前 骨皮 庖丁髯 三人片輪 禁野 腐磔  
餅酒 柿山伏 萩大名 棒縛

第四冊(ニ、五二丁)

- 音曲髯 二人袴 笄 口真似 苳薬煉 腐かり金  
舎弟 惣八 痺 茸山伏

第五冊(ホ、五六丁)

- 長光 竹生鳴参 芥川 蟹山伏 柑子 花争  
伯養 縄綯 引括 水掛髯

第六冊(ヘ、六五丁)

- 鍋八撥 墨塗 文相撲 鞍馬参 鼻取相撲 止動方角  
鱸庖丁 岡太夫 若喝沈 狐塚

第七冊(ト、五五丁)

- 松脂 鼻取相撲 井礮 閻罪人 水掛髯 文相撲  
蜷 宗論 竹の子 川原太郎

第八冊(チ、五六丁)

- 悪太郎 地藏舞 花折 呂連 薩摩守 布施無経  
金津 腹不立 宝の槌 煎物

第九冊(リ、四七丁)

- 福ノ神 目近 通円 楽阿弥 祢宜山伏 犬山伏  
枕物狂 腰折 祐善 若市

第一〇冊（又、五七丁）

察化 磁石 船ふな 昆布壳 不悪 以呂波

千鳥 居杭 栗焼 素袍落

第一一冊（ル、四九丁）

章魚 泉山臥 法師母 塗師 二千石 鶏泣

茫々頭 文蔵 富士松 成上

第一二冊（ヲ、五六丁）

名取川 昆布柿 清水 脱 首引 猿座頭

鬼継子 節分 宗論 千切木

第一三冊（ワ、四六丁）

鎧 福ノ神 三本柱 末広 文山賊 茶壺

横座 偽盗人 二人大名 鬼瓦

第一四冊（カ、五三丁）

八句連歌 財宝 子盗人 三人夫 鶏智 瓜盗人

太刀奪 連歌盗人 伊文字 合柿

第一五冊（タ、四七丁）

御茶水 吃 鎌腹 右近左近 麻生 松脂

秀句傘 仏師 悪坊 飛越

重出するものもあつて、実数は一四二曲。ただし重出するものも同一とは限らず、「若市」は第二冊の内題下に「節付」、第九冊の内題下に「型付」と記し、内容もその通りである。第一一冊「茫々頭」に「北野参とも」、第一五冊「御茶水」に「水汲氏」の注記がある。第一〇冊「武悪」

の奥に、

文政五年<sup>午</sup>ノ四月写之ノ山本柳寿所持

同「素袍落」の奥に、

文政六年ノ未正月下旬写之ノ山本氏

とあり、また第一二冊「鬼継子」の奥に、

文政七<sup>甲</sup>歳五月廿三日ノ写之原本横山氏蔵庫

第六冊「止動方角」の奥に「当師直伝」として、その裏に、

表二書当師直伝とハ横山勝助本ニ有リ当師とハ大蔵八右衛門か事なる

べし

とあることから、大蔵八右衛門派の台本を横山勝助が書き留めたものを、

文政五ノ七年頃、山本柳寿が書写したものと考えられる。ただし、第三冊「雁磔」の奥には、

本文そら書ゆへ迄等も有るへし考え見るへし

とあり、他にも「空書」などとするものがあつて、すべてが横山本を書

写したものと限らないらしい。また第一〇冊「察化」の奥に、

右すつば文政六年<sup>未</sup>ノ二月十五日於西座敷勤之ノ山本氏

とあるなど、山本柳寿の出勤の記録を記すものもある。第三・四・五・

六・一〇・一二・一三・一四・一五冊は曲ごとに丁を改めており、また

右のように原後表紙と考えられる丁に注記があるので、一番綴本を合綴

したものなのかも知れない。横山勝助・山本柳寿については未考である

が、詞章から見て確かに八右衛門派の台本である。「花盗人」「茸山伏」

「芥川」「財宝」は番外曲。「狐塚」は小書はないが小歌が入っている（次



項参照)。なお、第一一・一五冊に焼け焦げがあるが本文にはかから  
ない。

三番目

(7) 大蔵八右衛門派狂言本 (96.8 大蔵流狂言)

写本、六冊。一三・四×二〇・二。袋綴、全五二五丁。藍色地菊花牡丹  
唐草押文様の表紙の左上に題簽を付し、「大蔵流狂言」と記し、その下に  
「一」「二」と冊順を付す。料紙は楮紙。各冊巻頭に上演順による分類を  
した所収曲の目録がある。本文に役名を付し、朱にて型付を書き入れて  
いる。各曲に装束付・小道具付がある。本狂言一六九曲と小謡などを収  
め、所収曲は左記の通り(曲名表記は内題による)。

卷之一(九四丁) 脇狂言

末 広 麻 生 目 近 三本柱 大黒連歌 夷子毘沙門  
夷子大黒 連歌毘沙門 松 脂 福廼神 煎 物 牛 馬  
鍋八ッ撥 宝乃槌 隠 笠 よろひ 餅 酒 筑紫奥  
昆布柿 鷹厂金 三人夫 庖丁髻 水懸髻 船渡髻  
八幡前 鶏 髻 音曲髻 引敷髻 岡太夫 二人袴  
賽の目 唐相撲

卷之二(九四丁)

二番目

文相撲 鼻取相撲 蚊角力 人 馬 今参り 秀句傘  
栗田口 入間川 萩大名 禁 野 鞞 猿 墨 塗  
鷹盗人 鬼 瓦 鷹 磔 二人大名

卷之三(八七丁) 雑狂言上

二千石 文 蔵 北野参り 竹生嶋参り 富士松 昆布売  
武 悪 止働方角 居 杭 栗やき 舟 船 鶏 立  
花 争 痺 痺 躰 柑 子 鞍馬参り 成 上  
空 腕 鐘の音 口真似 察 化 太刀奪 芯 奪  
いろは 縄 絢 千 鳥 附 子 棒縛り 狐つか

卷之四(八六丁) 雑狂言中

酔はしかみ 苜蓿煉 舍 弟 竹の子 八句連歌 むね突  
文山立 合せかき 土 筆 横 ざ ろれん 鈍太郎  
吃 伊文字 因幡堂 鎌 腹 右近左近 伯母ヶ酒  
河原太郎 かゝみ男 ちきり木 磁 石 瓜ぬすひと 盆さむ  
三人片輪 茶つぼ ながみつ 米いち

卷之五(九八丁) 雑狂言下

飛 越 地藏舞 名取川 悪太郎 仏 師 惣 八  
花 折 御茶水 かな津 骨 皮 伯 養 井 礮  
猿座頭 不聞座頭 八 尾 朝比奈 政 頼 節 分  
雷 鬼の継子 首 曳 ぬけから しみつ 閻罪人  
祢宜山伏 犬山ふし こし礪 かに山ふし 柿山ふし 服ろやまふし  
らうむしや によく一 髭矢倉 章 魚 祐 善 ぬ し

卷之六（六六丁）

外狂言

清水毘沙門 れん尺 角水 かしまもふて 泣尼 小原梅  
 うらしま 鈍根草 警女座頭 あくた川 岩太らう 茸山ふし  
 二人座頭 鵬 鳥 木六駄  
 替狂言

狐塚小唄 猿座頭舞入 鐘の音濟人出

小謡 二〇番 浜松他

小舞 一六番 雪山他

仕舞 六番 鶴の段他

独吟 四番 海道下り他

語 九番 那須他

笛大小太鼓之部 三段之舞他

「外狂言」までの分類の配当が大蔵八右衛門派の江戸後期の書上にほぼ一致する。そして「嘉永二年名寄」（国会図書館蔵山田弥兵衛本所収）は稽古順による分類だが、所収曲が特に本書と近い。従って、同派の江戸末期の台本であろう。奥書がなくて成立事情が不明であり、「比丘貞」「枕物狂」「花子」「釣狐」の大曲を欠くが、八右衛門派の台本でこのようにまとまったものは他になく、貴重である。特に「外狂言」が珍しいが、「角水」は百姓狂言で、大蔵虎明本・虎光本にもある。「木六駄」は山本東次郎家の台本に近い。私は先に「木六駄」の形成と展開（能 研究と）

評註「三、昭和四九・一」で、現在山本家に固有の演出を宗家系のものかとしたのだが、或いは八右衛門派に学んだものかも知れない。「替狂言」は別演出のものを集めており、「狐塚小唄」は小歌が入るものだが、明治以降「狐塚小唄入」として現行曲となっている。「猿座頭舞入」は座頭の舞が入るもので、虎明本と同じである。「鐘の音濟人出」は仲裁人が出るものだが、宗家系ではそれが通常の演出である。

II 和泉流台本

(8) 和泉流十五番狂言本 (96.21 狂言本 井杭外十四編)

写本、一冊。二三・二×一六・六。袋綴、六四丁。茶色無地の表紙の全面に上下二行に所収曲の目録を打付書にて記す。本文に役名を付し、朱にて型付を書き入れる。各曲に装束付・小道具付がある。一五曲を収め、所収曲は左記の通り（曲名表記は内題による）。

井 杭	ふ 好	花盗人	鞠座頭	磁 石	唐 舟
茶子塩梅	弓矢太郎	武 悪	狐 塚	福 神	佐渡狐
名取川	うし盗人	昆布売			

稽古用の台本であろうが、詞章から見て江戸後期書写の和泉流宗家系の台本と考えられる。「茶子塩梅」「牛盗人」といった比較的遠いものを収めているのが珍しい。「唐舟」は間狂言。

(9) 和泉流三宅派狂言本 (96.8) 狂言集 (和泉流)

写本、六冊。一二・八×一八・二。袋綴、全二、〇七二丁。黄色無地の表紙の中央上に、内霞、朱・青・緑色横線引、金切箔散らし文様の題簽を付し、「狂言集」と記し、その下に「一」「二」と冊順を付す。料紙は薄様。各冊巻頭に目録がある。各曲に装束付・小道具付がある。全二四二曲を収め、所収曲は左記の通り(曲名表記は内題による)。

第一冊(一七八丁)

大黒連歌 夷大黒 夷毘沙門 毘沙門連歌 福之神 筒竹筒

三人長者 松囉子 松脂 塗付 餅酒 筑紫奥

松樫 昆布柿 鴈厂金 勝栗 三人夫 鍋八撥

牛馬 連雀 唐相撲 麻生 末広 張蛸

目近 三本之柱 粟田口 雁盗人 雁磔 靱猿

今参 文相撲 鼻取相撲 人馬 蚊相撲 秀句傘

入間川 墨塗 二人大名 禁野

第二冊(一九二丁)

萩大名 八幡前 角水 賽之目 岡大夫 折紙鯉

船渡鯉 水掛鯉 孫鯉 二人袴 猿鯉 鶏鯉

音曲鯉 懷中鯉 口真似鯉 庖丁鯉 引敷鯉 樽鯉

貫鯉 法師母 布施無経 地藏舞 宗論 名取川

登知波久礼 酒講之式 骨皮 宗八 柱杖 呂連

泣尼 魚説法 小傘 腹不立 仏師 金津地藏

六地藏 若和布 忠喜 笄

第三冊(二〇六丁)

柑子 口真似 寝音曲 樋の酒 棒縛 附子

文荷 狐塚 鬼瓦 武悪 止動方角 素袍落

木六駄 長刀応答 米市 仁王 瓢の神 井杭

八句連歌 胸突 比丘貞 昆布壳 酢姜 膏薬煉

芥川 鶯 鳴子遣子 鱸庖丁 北条種 舍弟

木実争 佐渡狐 隠狸 いろは 牛盗人 弓矢

業平餅 庵の梅 六人僧 鞍馬鯉 鳴子 蜘蛛盗人

第四冊(二六〇丁)

薩摩守 悪坊 悪太郎 花折 雪打 鈍太郎

若市 水汲 大般若 石神 哥争 飛越

楽阿弥 祐善 蛸 通円 野老 双六

蟬 塗師平六 若菜 爽物 田植 金岡

枕物狂 才宝 老武者 髭櫓 今神明 茶子塩梅

歌仙 太鼓負 児流鑄馬 千切木 川原太郎 引惣

鏡男 箕被 内沙汰 子盗人

第五冊(二六八丁)

長光 磁石 三人片輪 不聞座頭 清水座頭 猿座頭

井礮 鞠座頭 伯養 川上 くさひら 泉山伏

蝸牛 腰折 蟹山伏 祢宜山伏 犬山伏 苞山伏

柿山伏 合柿 文蔵 二千石 菊の花 竹生鳴詣

富士松 太子手鉾 鞍馬参 鈍根草 鐘の音 縄ない

胼 しひり 千鳥 空腕 杭かか 舟ふな  
 鶏流 花争 御冷 栗焼  
 第六冊(一六八丁)

伊文字 釣針 岩橋 二九十八 吹取 因幡堂  
 鎌腹 ともり 連哥十徳 瘦松 柑子俵 閩罪人  
 清水 ぬげから 簸屑 瓜盗人 さつくわ 鎧腹巻  
 宝之槌 宝之笠 伯母ヶ酒 首引 鬼継子 節分  
 朝比奈 馬口勞 政頼 博奕十王 八尾 雷  
 連歌盗人 花盗人 文山賊 盆山 横座 茶壺  
 太刀奪 真奪 腥物 成上り

この所収曲ならびに曲順が、笹野堅氏が「古本能狂言・間につきての研  
 究——和泉流本——」(『日本演劇史論叢』昭和一二)で紹介された三宅  
 正信本と一致する。三宅正信本は見えていないが、本書の本文は「和泉流  
 狂言大成」(大正六、七)と同じである。同書は山脇和泉元照編とあるも  
 のの、笹野堅氏「活版能狂言・間の本解説」(『演劇学』昭和一一・五)  
 によれば、実は三宅藤九郎正之・乙九郎の書き留めた台本を底本とする  
 ものとのことである。従って、本書も三宅派の台本、恐らくは三宅正信  
 本を江戸末期に書写したものであろう。第一冊巻頭に「北大」の蔵書印  
 がある。

### III 狂言記

(10) 元禄一二年版狂言記 (96.11) 入絵狂言記

刊本、五冊。一〇・七×一六・二。袋綴、全一六〇丁。藍色無地の表紙  
 の左上に刷り題簽を付し、「入絵狂言記」と記し、その下に「一」「二」と巻  
 数を付すが、第一・三・四巻は原題簽を欠き、後補して書いている。料  
 紙は楮紙。匡郭、九・二×一四・八。各巻頭に曲名・役名・装束の目録  
 がある。五巻、各巻一〇曲、全五〇曲所収。半分の二五曲に墨印にて舞  
 台図を添える。第五巻巻尾に左記の通りの奥付がある。

右狂言記拙者家之／雖為秘密任御所望ニ／写之板行者也せりふ／詞  
 遣或ハ仮名遣悪キ事／可有之併狂言綺語也

元禄十二巳卯霜月吉日

寺町通二条下 野田弥兵衛

堀河六角下 八尾平兵衛

江戸通石町 野田重兵衛

以下「狂言記」の類については、笹野堅氏「版本狂言記・間の本解説」  
 (『演劇学』昭和一一・九)・池田廣司氏「古狂言台本の発達に關する研究」(昭和  
 四二)などに詳しいので、所収曲等については省略する。

(11) 元禄一三年版統狂言記 (96.12) 入絵統狂言記  
 刊本、五冊。一一・三×一六・〇。袋綴、全一七八丁。藍色無地の表紙

の左上に刷り題簽を付し、「統狂言記」と記し、その下に「一」「二」と巻数を付すが、第五巻は原題簽を欠き、後補して書いている。料紙は楮紙。匡郭、八・七×一四・〇。各巻頭に曲名・役名・装束の目録がある。五巻、各巻一〇曲、全五〇曲所収。半分の二五曲に墨印にて舞台図が添えられている。刊記は左記の通り。

元禄十三年／庚辰 九月吉日

江戸通本石町 山形屋吉兵衛

京相河

八尾平兵衛

⑩の「狂言記」の統編として刊行されたものである。

(12) 享保一五年版狂言記拾遺 (96.13) 入統狂言記拾遺

刊本、五冊。一〇・七×一五・九。袋綴、全一八四丁。藍色無地の表紙の左上に刷り題簽を付し、「統狂言記拾遺」と記し、その下に「一」「二」と巻数を付す。料紙は楮紙。匡郭、九・〇×一三・二。各巻頭に曲名・役名・装束の目録がある。五巻、各巻一〇曲、全五〇曲所収。半分の二五曲に墨印にて舞台図を添える。刊記は左記の通り。

享保十五庚辰 年極月吉日

京都 寺町二条下ル丁 野田弥兵衛板

江都 石町拾軒店 同太兵衛

⑪の「狂言記」(11)の「統狂言記」の統編として刊行されたものである。

(13) 享保一五年版後刷狂言記拾遺 (96.6) 入統狂言記拾遺  
刊本、五冊。(12)の野田版の後刷本。白色地、海松布草花散らし文様の表紙である他は(12)に同じ。刊記は左記の通り。

享保十五庚辰 年極月吉日

京寺町通松原上ル町 菱屋治兵衛板

野田版の方が原版であることは、林和利氏が「狂言記の出版状況」(『能研究と評論』九、昭和五五・一二)で紹介された「割印帳」の記録によって明らかである。また本書の編纂者が服部勘介なる者であることも記されている。

(14) 嘉永元年版狂言記 (96.7) 入統狂言記(狂言)統編(拾遺)

刊本、六冊。一二・五×一八・四。袋綴、全五二二丁。茶色地、流水草花散らし押文様の表紙の左上に刷り題簽を付し、「統狂言記」と記し、下に冊順を付すが、第一・四・五・六冊は題簽を欠く。料紙は楮紙。匡郭、九・一×一五・〇。(10)の「狂言記」(11)の「統狂言記」(12)の「狂言記拾遺」を合わせて一五冊一揃いとして文化七年に再版され、嘉永元年に再摺されたものを六冊の体裁にしたものである。笹野氏「版本狂言記・間の本解説」(前掲)によれば六冊仕立てのものは明治以降の再版とのことであるが、いつ頃のものかは明らかではない。第一冊は「狂言記」巻一〜三、第二冊は「狂言記」巻四・五、第三冊は「統狂言記」巻一〜三、第四冊は「統狂言記」巻四・五、第五冊は「狂言記拾遺」巻一〜三、第六冊は「狂言記拾遺」巻四・五を収め、各冊巻頭に所収巻の目録丁を集めている。

る。第六冊巻尾に(10)の「狂言記」の「右狂言記……」を跋文として載せ  
 「元禄十二歳」<sup>巳卯</sup>霜月吉日」の日付を記し、次に既刻三点(狂言記・続  
 狂言記・同拾遺)・近刻一点(同外編)の広告を載せ、その次に左記の通  
 りの刊記がある。

嘉永元年 戊申七月

江戸堀北二丁目 鷺津辰三郎

心齋橋北久太良町 柳原喜兵衛

全 安土町 川口宗兵衛

全 北久太良町 橋本徳兵衛

(15) 嘉永元年版後刷狂言記 (96.8) <sup>入</sup> 狂言記「一六」

刊本、六冊。(14)の「狂言記」の後刷本。黄色地、<sup>二</sup>つなぎ押文様の表紙  
 で、各巻の目録丁がそれぞれの巻頭にある他は(14)に同じ。各冊巻頭に「閑  
 楽／亭記」の蔵書印がある。刊記は、第六冊最終丁裏に(14)と同じものが  
 あり、さらに後見返しに、

大阪心齋橋通北久太良町四丁目 柳原喜兵衛

同 橋本徳兵衛

東京日本橋通四丁目 江島伊兵衛

とある。鴻山文庫に同じものがあり、鴻山文庫主江島伊兵衛氏の箱書に  
 よれば、明治二七、八年頃の求版刊行かとのことである。

#### IV 間狂言

(10) 大蔵流間狂言本 (96.18) 大蔵流狂言

写本、一冊。一九・三×二三・七。袋綴、墨付二三丁、前後に遊紙各  
 一丁。刷毛目丁字格子文様の表紙の左上に題簽を付し、「大蔵流狂言」と  
 記すが、内容は間狂言の台本。料紙は薄様。巻頭に目録がある。曲順と  
 若干の本文訂正を朱にて書き入れている。八九曲を収め、所収曲は左記  
 の通り。

高砂	鶴亀	巻絹	小督	盛久	鶴飼
橋弁慶	海人	自然居士	羅生門	鞍馬天狗	夜討曾我
竹生嶋	兼平	六浦	船弁慶	融	氷室
八嶋	女郎花	百万	車僧	弓八幡	籠
井筒	三井寺	巴	鉢の木	経政	仏乃原
船橋	鶴	龍田	野守	梅かえ	阿漕
鐘馗	錦木	富士太鼓	当麻	山姥	藤戸
熊坂	求塚	遊行柳	当麻	山姥	藤戸
右近	和布利	葵上	西行桜	かんたん	項羽
三輪	芭蕉	東北	加茂	田村	実盛
紅葉狩	善知鳥	殺生石	葛城	檀風	安宅
国栖	放下僧	吉野静	唐船	籠太鼓	俊寛
威陽宮	春栄	藤永	鉄輪	蟬丸	摂待
斑女	雲雀山	弱法師	双紙洗	烏帽子折	東岸居士

花月 芦刈 碓 舞車 老松

ただし、「老松」の本文は一行で中絶している。五十一曲目の「葵上」で丁を改めており、百曲程度をめぐりとしていたものであろうか。系統は判断し難いが大蔵流のもので、江戸後期の書写であらう。

(17) 間仕舞付 (96.25 当間仕舞付)

刊本、五冊。一・一〇×一六・一。袋綴、全二二二丁。藍色無地の表紙の左上に刷り題簽を付し、第一・二冊は「当間仕舞付」、第五冊は「あしまひ付」と記し、その下に「脇二」「修羅二」「切五」と付す。第三・四冊は剝落している。料紙は楮紙。間狂言の台本であり、五巻で、各巻頭に「脇間」「修羅間」「葛間」「順間」「切間」の「目録并衣裳付」とあって、曲名・装束の目録がある。第五冊は「切間」の次に、「能礼式作法記」・狂言小道具図・「京都能役者居宅并指南者」(全一九丁)を付す。各巻一〇曲、全五〇曲を収め、所収曲は左記の通り。

脇間 (三五丁)

高砂 老松 弓八幡 難波 賀茂 白楽天  
竹生嶋 水室 養老

修羅間 (四七丁)

田村 八嶋 箴 兼平 忠則 頼政  
敦盛 実盛 道盛 朝長

葛間 (三六丁)

東北 江口 誓願寺 はせを 采女 楊貴妃

松風 井筒 野々宮 当麻

順間 (三九丁)

羅生門 長郎 土蜘蛛 葵上 金輪 放下僧  
安宅 紅葉狩 舟弁慶 安達原

切間 (四六丁)

龍田 自然居士 鉢木 夜討曾我 是界 項羽  
鵜飼 海士 とほる 三輪

各巻の目録の裏に、それぞれ「高砂」「田村」「東北」「羅生門」「自然居士」の舞台図が墨印にてある。刊記は、

貞享三四年九月良辰

洛陽書林 田中庄兵衛寿

梓

とあって、「田中庄兵衛」の左に「山本又兵衛」とあったものが削られているので、後刷本であらう。笹野堅氏「版本狂言記間の本解説」(前掲)によれば、原版には跋文があり、「能礼式作法記」以下がないとのことである。そして「能礼式作法記」以下は同年に同版元より刊行された「能訓蒙図彙」より転用したものとことであるが、貞享三年版「能訓蒙図彙」なる書は知らない。「能礼式作法記」は間狂言の語り方の心得などを説くもので、宝暦名女川本の「万聞書」(能楽資料集成宝暦名女川本萬聞書)に翻刻されている)にも書写されている。「京都能役者居宅并指南者」は貞享四年版「能之訓蒙図彙」の「京都芸者名付」に類似したのだが、若干の出入りがある。

(18) 刊本写間仕舞付 (96.21 当間仕舞付)

写本、五冊。一一・八×一六・八。袋綴、全二〇三丁。刷毛目丁字格子文様の表紙の左上に題簽を付し、第一・二・四冊は「当間仕舞付」、第三・五冊は「当あいしまひ付」と記し、その下に「脇二」「修羅二」「葛三」「脇四」「切五」とある。料紙は楮紙。(17)の「間仕舞付」を書写したもので、舞台図まで細密に写している。ただし「能礼式作法記」以下はないので、(17)そのものを書写したものでかどうかはわからない。跋文はない。

V その他

(19) 鷺流狂言小謡 (96.3 鷺流狂言小謡)

写本、一冊。一三・三×一九・〇。袋綴、墨付一四丁、前に遊紙一丁。茶色無地の表紙で、題簽はない。目録題に「鷺流狂言小謡」とある。料紙は楮紙。巻頭に目録がある。小舞謡三三曲を収め、所収曲は左記の通り(曲名表記は内題による)。

弓矢立合	土車	三人夫	若菜	餅酒	懸川
雁厂金	哀一枝	宇治の晒	採栗	松樫	いともの細き
宝の瘤取	若松	番匠屋	石引	あんの山	小山伏
京土産	片妻	海道下	十七八	福の神	春雨
住吉	七ツに成子	鶉之段	景清	末の松山	道明寺
杉の木	とをる	鶴亀			

全曲に節付があるが、「弓矢立合」から「鶉の段」までと、「末の松山」

「杉の木」には朱にて細かな節扱いを注記し、「鶉の段」「杉の木」にはさらに型付を書き入れている。鷺流のものに違いなく、江戸後期の書写であろう。

(20) 和泉流狂言名寄 (96.20 和泉流名寄狂言目録)

写本、一冊。一二・七×一九・九。仮綴の袋綴、二五丁。本文共紙の表紙の左上に打付書にて「和泉流名寄／狂言目録」と記す。料紙は楮紙。本狂言の名寄で、一面に五曲、上段に曲名を記し下段に各曲の登場役名を記す。配列はイロハ順で、本狂言二四二曲を並べ、その後「千歳」「三番叟」と記す。本狂言の所収曲が(9)の「和泉流三宅派狂言本」の所収曲と一致しているので、和泉流三宅派の江戸末期の名寄であろう。或いは(9)そのものに添えられていたのかも知れない。